

京都地方
労働者教育史

発刊のことば

京都勤労者学園が創立されたのは、一九五七年三月三〇日でしたが、その二〇周年の記念事業として、ここに『京都地方労働者教育史』をみなさまのお手許にお届けできましたことを、この上もなく欣快に存じております。

同書の執筆に精根を傾けていただいた元学園専務理事・石田良三郎氏、監修の労をわずらわせました京都大学・渡部徹教授、その他多くの関係者の方々に、学園として心からの敬意と謝意を表したいと思えます。

ご一読いただければおわかりのように、労働者教育運動にひたむきの情熱とエネルギーを注いでこられた石田氏の、客観的な叙述の行間になお溢れ出ている、運動が躍進しているときのよろこびと、停滞したときの口惜しさを、わたくしたちは痛いほどに感じ取ることができるよう思われます。

そして、労働者教育運動のために、戦前から今日にいたるまで、いしれぬ数多くの困難とたたかい克服の努力を重ねてこられた先達のみなさん方のご労苦に深い感動を覚えずにはいられません。

戦前篇は、主として渡部徹編著『京都地方労働運動史』に依って記述されたのですが（「はしがき」参照）、ここには、第一次世界大戦後の恐慌の嵐が吹きすさぶ中で、一九二〇年に「本格的な労働者

教育運動の夜明けの年」を迎え、京都がその先駆的な役割を果たしたことが記されています（五四頁以下）。そして、山本宣治を初代校長とする京都労働学校は一九二四年四月から二六年春まで開講されましたが、この間、特高警察が、組合運動や労働学校をスパイするために、会場の隣家の天井をつつぬけにして見張っていました（一〇六頁）。治安維持法が一九二五年春に制定されたことは周知のとおりです。その後、労働者教育活動は一九三三年まで続けられましたが、常設の労働者教育機関としては、一九三一年一月に開設された京都労働学校が最後だった、と述べられています。この年、「満州事変」が惹き起されました。狂奔する戦争の激流が、労働者の勉学する権利を押し流してしまつたのです。

戦後篇は、敗戦による廃虚と飢餓と異民族による占領政策の苦難の中で、四六年初頭には早くも京都民主戦線が結成され、同年三月には京都人文学園が開校されました。「青年たちは真理に飢えていたが、同時に飢餓に胃をさいなまれていた：：腹が減るから登校しないで家でなるべく動かないようにして寝ていると連絡してきた生徒もあつた」と当時の生々しい状況の一端も記されています（二二八頁）。四七年五月には、労働団体代表・地労委代表・学識経験者からなる労働者教育委員会が設けられて、七月に京都労働学校が設立され、戦後、日本で最初の労働組合による労働大学として全国的に注目されました（二五六頁）。けれども、その後、米ソ両陣営の対立が急速に激化する中で、かつてマッカーサーによって「東洋のスイスタレ」とされた日本が「反共の防壁」として位置づけられると

